HOKUGA 北海学園学術情報リポジトリ
学校法人北海学園
北海学園大学
北海商科大学

タイトル	スコットランドの「ノルマン・コンクェスト」(3)：王権と辺境地帯との関係をとおして
著者	常見，信代
引用	北海学園大学人文論集，26・27：99-131
発行日	2004-03-31

Hokkai-Gakuen Organization of Knowledge Ubiquitous through Gaining Archives.

スコットランドの「ノルマン・コンクエスト」(3)
── 王権と辺境地帯との関係をとおして ──

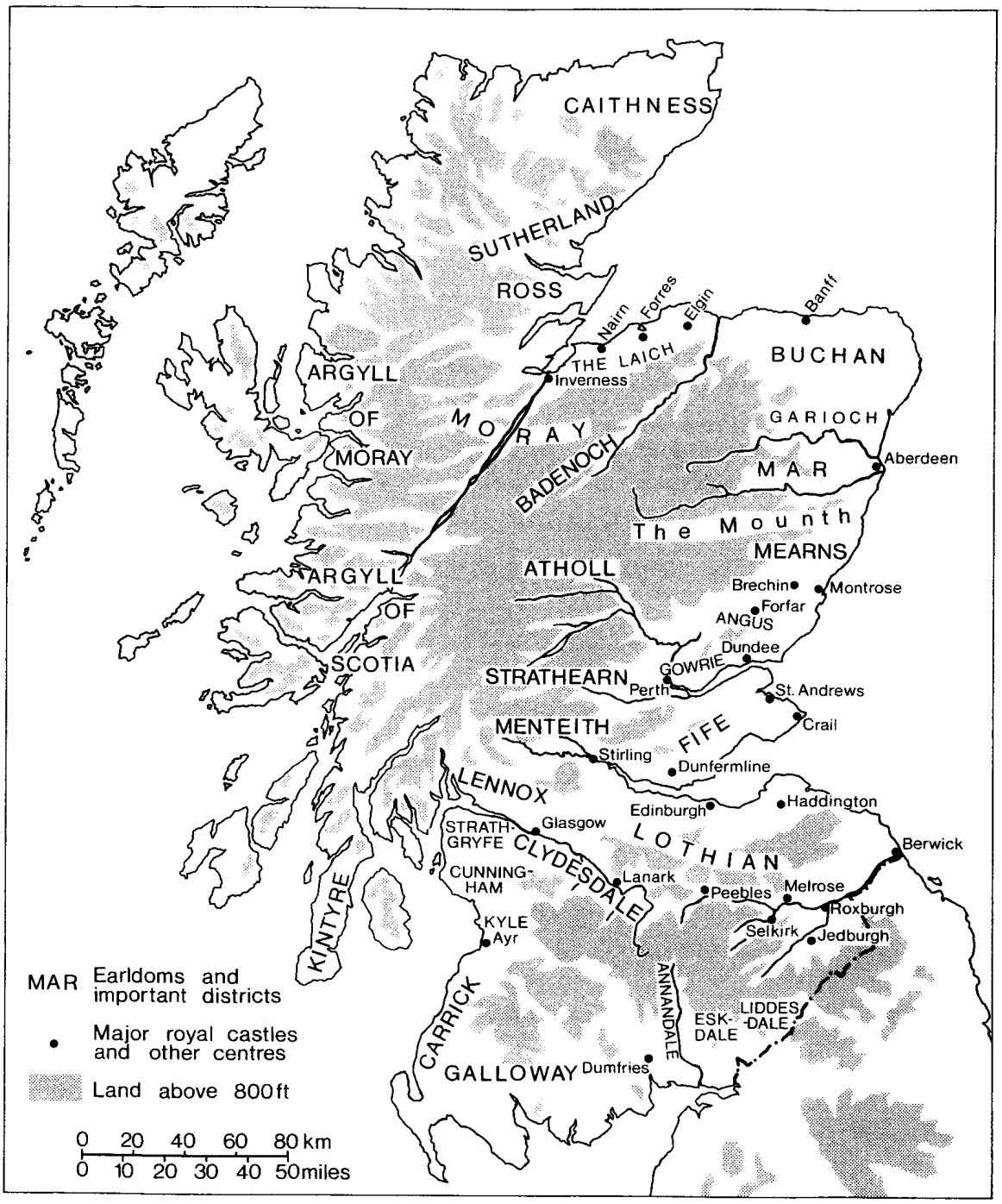
常　見　信　代

はじめに

スコットランドの「ノルマン・コンクエスト」とは，デイヴィド1世(1124－1153，在位―以下同様）以後のスコットランド王権がアングロ・ノルマンを招致して推進した封建化政策や行政機構と教会・修道院の刷新などをさす。その実態を明らかにするために，これまでに2編の拙稿において，デイヴィド1世，マルコム4世(1153－1165)，ウィリアム1世(1165－1214）の治世におけるアングロ・ノルマン系貴族と在地貴族それぞれについて，王権との関係や彼らが作り上げた人的ネットワークなどを検討した[1)]。しかし，そこで取り上げた事例は，いずれもスコットランド王権と密接な関係にあった貴族であり，程度の差はあれ王国の中の王権が浸透した地域に足場を置いていた。ところが，12世紀－13世紀初頭のスコットランドにはもう1つの地域があり，スコットランドの「ノルマン・コンクエスト」の全体像を描くには，これらの地域と王権との関係やそこにおけるアングロ・ノルマン文化への対応などを検討する必要がある。本稿では，これらの地域とスコットランド王権との関係に焦点をあてて検討する。

1．‘inner zone’

あらかじめ12世紀－13世紀初頭のスコットランド王国に存在した2つの地域を史料の上で確認しておく。その方法の1つが国王の勅許状や令状の発給された場所から宮廷の所在地やその活動範囲を探ることである。



Scotland c. 1200
K.J.Stringer, *Earl David of Huntingdon* より

G・W・S・バロウ編『スコットランド国王文書集』の第1巻－第3巻には，上記3代の国王の証書類(acts)が収録されているが，その中に，'apud Edenburg' のように発給地を記載したものが，デイヴィド1世とノーサンバランド伯ヘンリについて115通，マルコム4世について106通，ウィリアム1世について438通それぞれ含まれている。表1は，これらの証書類

を発給地ごとに分類したものである[2)]。なお，この統計は現存する証書を対象としたものであり，ある地方で発給された証書類がたまたま多く残存し，他の地方のそれらが消失した可能性のあることはもちろんである。

このような前提のもとで表1を見れば，デイヴィド1世とマルコム4世の時代には，宮廷の活動が南東部にあるロクスバラなどティーヴィアト川の上流地帯（Teviotdale）とトゥイード川の上流地帯（Tweeddale）および中央部にあるダンファームリンやスターリング，エディンバラなどフォース湾に面した地域，それに北東部にあるパースやスクーンなどのテイ川河口地帯を中心に活動していたことがあきらかである。しかし，ウィリアム1世の時代になると，宮廷はこれらの3地域を依然として訪れてはいるが，その比率は低下し，代わってスターリングおよびその北のパース，さらに北のフォーファなど王国の北東部に次第に活動の重心が移動しているのを読み取ることができる。これは，デイヴィド1世の時代に王国の南部から始まった封土の授与やアングロ・ノルマンの定住などの'Norman Settlement' の北上の動きに対応している[3)]。この動きは，次の表からもあきらかである。

表2は，上記3代の国王の証書類などに記録されているシェリフ管区(sheriffdom)とシェリフの名前を書き出したものである。個人名の記載はないがシェリフやシェリフ管区への言及がなされている場合は，これらの文言自体を表に加えた。年代は，当該文書の作成時期をあらわす。つまりシェリフ管区が創設された時期ではなく，現存史料でその存在が確認できる時期を示している。したがって，これ以前に既に存在していた可能性もある。

シェリフは，地方において国王行政を担う役人であり，12世紀にイングランドの制度にならって導入された。「ノルマン・コンクェスト」に伴う行政制度刷新の1つである。その職務は現物貢租(cain)など国王収入の徴収をはじめ広範囲に及ぶが，特に管内の王城や王許都市（royal burgh）と密接な関係を持っていたことが知られている。また，ウィリアム1世時代の初期にシェリフが国王裁判にかかわっていたことを示す例があり，それ以

表1　国王証書の発給地

〔南東部〕

発給地	デイヴィド1世	ヘンリ	マルコム4世	ウィリアム1世
Roxburgh	10	3	10	14
Jedburgh (Roxburghshire)		2	6	17
Melrose (Roxburghshire)				3
Berwick upon Tweed	4		5	5
Irvine (Berwickshire)	2			
Coldingham (Berwickshire)	1		4	
Earlston (Berwickshire)	1	1		
Bunkle (Berwickshire)				1
Peebles	3		3	2
Traquair (Peeblesshire)	1	1	3	14
Selkirk	1	1	3	27
St Mary's Loch (Selkirkshire)				3
Restalrig (Selkirkshire)				1

〔中央部〕

Edinburgh (Midlothian)	14	1	20	34
Eldbottle (East Lothian)	2		2	
Haddington (East Lothian)	2	2		18
Linlithgow (West Lothian)			2	8
Stow (Midlothian)				2
Stirling	13		13	44
Kinross	6		3	1
Clackmannan	2		4	10
Dunfermline (Fife)	12		7	12
Kinghorn (Fife)	1	1		21
St Andrews (Fife)	1	1	5	8
Crail (Fife)				8
Auchtermuchy (Fife)				2

〔北東部〕

Perth	5		13	46
Scone (Perthshire)	11			1

発給地	デイヴィド１世	ヘンリ	マルコム４世	ウィリアム１世
Abernethy (Perthshire)	1			
Clunie (Perthshire)	1			5
Forteviot (Perthshire)			1	1
Alyth (Perthshire)				8
Forfar (Angus)	2			46
Montrose (Angus)				20
Brechin (Angus)			1	1
Charleton (Angus)				2
Arbroath (Angus)				1
Kincardine (Mearns)				5
Aberdeen	1		1	6
Kintore (Aberdeenshire)				2
Fyvie (Aberdeenshire)				1 (1211)
Banff	1			
〔南西部〕				
Lanark				14
Cadzow (Lanarkshire)	2			
Glasgow	1			
Rutherglen (Lanarkshire)				1
Dumfries				2(1175×1177, 1183×1188)
Staplegordon (Dumfriesshire)	1			
Gretna (Dumfriesshire)				1(c.1185)
Lochmaben (Dumfriesshire)				1(1165×1172)
〔北部〕				
Elgin (Moray)				14(1161−1214)
Forres (Moray)				2(1211)
Nairn				1(1211)
Auldearn (Nairnshire)				1(1179)
Inverness				1(1172×1174)
合計	102	13	106	438

＊(　) 内の数字は，発給年を示す。

表2　12世紀－13世紀初頭のシェリフ

〔南東部〕

シェリフ管区	デイヴィド1世治世	マルコム4世治世	ウィリアム1世治世
Roxburgh	1120×1131 Cospatrick 1147×1153 Robert son of Guy		1165×1171 John son of Orm 1177×1189 Walter Corbet 1194×1207 Herbert of Maxwell 1207 John of Maxwell* 1212×1214 Bernard of Hadden
Berwick upon Tweed	*c*. 1136×1147 Norman	1162×1165 'vicecomes de Berwic'	1165 1174 'vicecomes de Berwic' *c*. 1195 'vicecomes de Berwic' ? Robert de Burneville ?×1203 Adam of Bunkle* 1212×1232 Walter of Lindsay*
Traquair			1184 Simon son of Malbeth
Selkirk			1195×1208 Alexander of Synton

〔中央部〕

Edinburgh		1153×1162 Robert (son of Guy) 1162 Geoffrey	1189×1195 Henry of Graham 1209×1211 Henry of Braid* 1198×1214 Michael Fleming* 1211×1215 John of Graham*
Lothian	1140 Durandus (Thor) 1141×1153 Thor (son of Swain)	Lothian → Edinburgh, Linlithgow, Haddington へ分割	
Haddington			1170 Hervey 1184 Alexander (of St Martin)
Linlithgow		1159×1162 Uhtred	1196×1198 Richard de Melville*
Stirling	1124×1147 William *c*. 1139 Gillbert 1150×1153 Dufoter		1165×1174 Ralph 1173×1195 William son of Thor 1189×1214 Alexander son of William
Clackmannan	1140×1152 'vicecomes de Clacmanet'	1159×1164 Gillemore	1205×1211 Alexander son of Thor
Dunfermline		1161×1164 'vicecomes suo de Dunfermelin'	1165×1168 Gillebride
Crail/Fife		1154×1178 William	? Geoffrey son of Richard

〔北東部〕

シェリフ管区	デイヴィド1世治世	マルコム4世治世	ウィリアム1世治世
Perth	1150×1153 'vicecomitatus de Pert'	1163×1164 Uuieth (William?)	1200× Ralph the clerk 1209−1214 Roger de Mortemer
Scone	1128×1136 Malotheni	1163×1164 Ewain	1194×1198 Macbeth
Forfar		1161×1164 'M. vicecomite de Forfar' (Malcolm mac Gillise?)	?×1213 William Comyn 1211 Daivid de la Hay ? Hugh de Cambrun*
Kincardine (Mearns)			1165×1178 John Hastings* ? Humphrey of Berkeley*

〔南西部〕

Lanark		1162 Baldwin of Biggar	1165×1171 Baldwin of Biggar 1187×1195 Robert son of Werenbald *c*. 1200 Reginald of Crawford*
Galloway			*c*. 1193×1195 'vicecomitibus suis de Galweia' et Carrik et Leuen'
Lennox			*c*. 1193×1195 'vicecomitibus suis de Galweia' et Carrik et Leuen'
Carrick			*c*. 1193×1195 'vicecomitibus suis de Galweia' et Carrik et Leuen'
Ayr			*c*. 1200 William*

〔北部〕

Moray			1172 'vicecomitibus suis Morauie' 1189×1195 'vicecomitibus suis de Morauia'
Nairn			*c*. 1200 William Freskin II
Inverness			1179 'in vicecomitatu illo' 1205×1207 'vicecomes meus de Inuernis'

〔注記〕

＊は，国王証書以外の史料から確認されるシェリフ。

前にも担当管区内で司法的役割を担っていたと推定される[4]。このような任務を負うシェリフを年代順にたどることによって王権の浸透範囲をある程度，特定することができよう。

表2を見れば，スコットランドにおけるシェリフ制は，デイヴィド1世時代に南東部のロクスバラやベリックおよびフォース湾に面したスターリングやロージアンなど，おもにフォース川の南で始まり，次第にこれらの周辺へ，さらにフォース川の北へと及んでおり，基本的には表1で確認された'Norman Settlement'の動きと同じである。たとえば，マルコム4世時代にクライド川上流地帯(Clydesdale)のラナークにシェリフが存在しているが，これはヨークシャ北部のクリーヴランド(Cleveland)からフランドル系騎士らがこの地帯に入植してマルコム4世から封土を授与されたことに対応している[5]。

次にシェリフの名前を見れば，その大半はアングロ・ノルマン系であるが，初期には南部で'Cospatrick'や'Thor'などアングル系の名前が，フォース川以北ではスクーンやクラックマナン，ダンファームリンでゲール系の名前が，それぞれ認められる[6]。特にスクーンでは12世紀末になってもゲール系の'MacBeth'がシェリフについているのが注目される。因みに，彼は，ウィリアム1世の他の2通の証書に記録されている'MacBeth Judex de Goury (Gowry)'，'MacBeth Judex Regis'と同一人物と推定される。この推定が成り立てば，スコットランド伝来の役職である'judex'と新来のシェリフ職とがゲール系の同一人物によって保持された例となる[7]。他方で，フォーファのシェリフ'M.'はスクーンのシェリフ'E.'(Ewain)とともにマルコム4世の令状の名宛人となっているが[8]，彼はマルコム4世の他の証書で同じ'Ewain vicecomes de Scone'とともに証人となっている'M. filio Gillise'と同一人物であり，さらにウィリアム1世の証書からこの'M. filio Gillise'は'Malcolm mac Gillise'であること，つまりゲール系であることが確認される[9]。

これらの例は，2編の拙稿において提示した結論，すなわちスコットランドの「ノルマン・コンクェスト」は在地勢力を排除するものでなかった

という結論が，シェリフ職についても妥当することを示している。さらに，スクーンやフォーファ，ハディントン，キンカーディンのシェリフ管区自体は12世紀以前から存在するセニジ（thanage）を土台に設置されたもので，そこではセイン（thane）に代わってシェリフがセニジの経営管理にあたっている[10]。

一方，シェリフの社会的出自を見れば，ウィリアム1世時代になると，ベリックのウォルタ＝オヴ＝リンジィ（Walter of Lindsay）[11]，パースのロジャ＝ドゥ＝モーティマ（Roger de Mortemer）[12]，キンカーディンのハンフリィ＝オヴ＝バークレィ（Humphrey of Berkeley）[13]，フォーファのウィリアム＝コミン（William Comyn）[14]やデイヴィド＝ドゥ＝ラ＝エイ（David de la Hay）[15]，ネアンのウィリアム＝フレスキン2世（William Freskin II）[16]のように，諸侯層出身のシェリフが多く出現しているが，これはスコットランドの「ノルマン・コンクェスト」の帰結の1つであった。すなわち，スコットランドの‘Norman Settlement’は，在地の土地保有者の大幅な追放などを伴わなかったから，王権が封土の創設のために利用できる土地資源は当初から限られ，全般に封土は小規模であったが，12世紀末には国王証書からも封土のための土地不足を読み取ることができるほどになっている[17]。この結果，アングロ・ノルマン系貴族は新来者を排除して司法長官（justiciar）などの要職につくか有力者と姻戚関係を結ぶことでその権力基盤を維持・拡大しようとした。上記のシェリフの例は，このような趨勢がシェリフ職に波及し始めていることを示している。なお，ウィリアム1世時代には世襲化の例としてスターリングのシェリフ（William son of Thor，Alexander son of William son of Thor）に見られるだけであるが[17]，13世紀の過程でシェリフ職はますます有力貴族の家門によって占められることになる。

以上の検討から，表1，表2で示される範囲が12世紀－13世紀初頭において王権がある程度まで直接浸透している地域ということができよう。これに対して，ファイフ（Fife）やアサル（Atholl），ストラサーン（Strathearn），メンティース（Menteith），バハン（Buchan）などの伯領とアン

ナンデイル（Annandale）やカニンガム（Cunningham），リズデイル（Liddesdale），ギャリオク（Gariock）などの諸侯領は，王権がいわば間接的に掌握している地域である。この当時，前者はおもにゲール系の在地貴族によって，後者はアングロ・ノルマン系貴族によってそれぞれ領有されていたが，けっして自立的な存在ではなかった。また，彼らはともに中央・地方統治の要職を占め，国王支配を支えていた[18]。

しかし，当時のスコットランド王国はこれらの地域だけではなかった。王国の一部ではあるが王権の浸透を示す痕跡が皆無の地域，あるいは12世紀末になってようやく王権の浸透が始まった地域が存在していたのである。たとえば，西部のアーガイル（Argyle）では，本稿の対象とする時期にシェリフ制の展開が見られないだけでなく，この地方に宮廷が訪れた痕跡もない。一方，北部のマリ（Moray）やロス地方（Ross）と南西部のギャロウェイ（Galloway）で王権の浸透が見られるようになるのは，ウィリアム1世治世の末期からである。本稿の冒頭で紹介した12世紀－13世紀初頭のスコットランド王国に存在した2つの地域とは，王権の直接的間接的浸透の見られる南部から北東部にかけての地域と，その浸透の皆無あるいは希薄な西部，北部それに南西部のギャロウェイとをさす。スコットランド中世史では前者をスコットランド王国の‘inner　zone’，後者を‘outer zone’とよんでいる[19]。

2．‘outer zone’

i）辺境地帯の「王」

a．マリ

12世紀－13世紀初頭の‘outer zone’には，いくつかの共通点が認められる。その1つは，デイヴィド1世の時代にマリ，ギャロウェイ，アーガイルの支配者がいずれも「王」を名乗っているか，あるいは年代記などで「王」とよばれていることである。

まず北部のマリについて見れば，この地方の支配者マクベス（MacBeth）

がダンカン1世(1034－1040)を殺害してスコットランド王位(1040－1057)についたことはよく知られているであろうが，マリと王権との対立は既に9世紀末から記録されており，11世紀に始まるものではない[20]。こうした対立の背景として，スコットランド王家の祖先がダルリアダのガブラン氏族(Cenél Gabráin)に属したのに対して，マリの支配者の系譜はこれに対立するローン氏族(Cenél Loairn)に属したことがあげられてきた。つまり，前者に属するケネス1世が9世紀中葉に東部に進出してピクト王国を併合した頃，対立するローン氏族の一部がマリを征服してそこに王国を築いたとされ，10世紀―11世紀のスコットランドにはゲール系の2つの王国が存在し，対立を繰り返したというのが定説とされてきたのである[21]。

この定説は，マリの支配者をローン氏族に結びつけている系図が11世紀末か12世紀初めに系図学者によって作成された可能性のあることが指摘され，近年になって再検討を迫られている[22]。また，マクベスの父(Findlaech mac Ruadri)が『アルスター年代記』に「アルバの王」(ri Alban)と記されていることがマリの独立を示す根拠とされてきたが，アイルランドの別の年代記ではマクベスの父が「マリのモルマー」(mormaer Moréb)とされ，父の従兄弟(Malcolm mac Maelbrighte)が「アルバの王」とよばれるなど，確かに年代記の呼称には混乱が見られる[23]。因みに，アルバとはスコシアのゲール語名である。したがって，ケネス1世以降，アルバにはただ一人の王が存在しただけで，マリはその王権に服属するモルマー(伯のゲール語名)によって治められ，時には王権と抗争することもあったが，王国の一部を構成していたと推測することも出来る。ところが，マルコム2世の王位がその娘(Bethoc)の子ダンカンによって継承されると，マリのモルマーであったマクベスがダンカンを殺害して王位についた。なぜなら，たとえ直系とはいえ，女性を通しての継承はダルリアダ以来の歴史の中で異例のことであり，マクベスは妻グロッホ(Gruoch)がケネス2世(あるいはケネス3世)の孫にあたることから，ダンカンに対抗して王位継承権を主張した。このような推論も成り立つであろう。

マクベスの敗死後，彼の継子ルーラハ(Lulach mac Gillacomgain)が

王位を継承するが，在位7か月でマルコム3世（1058－1093）との戦いに敗れ，王権は再びスコットランド王家に復帰した。しかし，その後も，1085年にルーラハの息子（Maelsnechta, d. 1085）が，さらに1130年にはルーラハの孫（娘の息子，Angus）が，それぞれ『アルスター年代記』には「マリの王」（ri Muiréb）の肩書を付されていることから[24]，依然としてマクベスの子孫がマリを支配していたと推測される。これがスコットランド王権の承認によるものか，あるいは独立の王国としてなのかは議論が分かれるが，オルデリック＝ヴィターリス（Orderic Vitalis）や『ホリルード年代記』，『メルローズ年代記』は，いずれも上記アンガスを「マリ伯」（comes Morafiae，comes Moraviensis）とよんでいる[25]。おそらくマルコム3世以後マリは伯領と位置づけられていたが，その伯はアイルランドの年代記に「マリの王」と見なされるほどの自立性を保っていたということであろう。

この地方に対して王権が本格的な浸透策を取るのは1130年の反乱鎮圧後である。表3に見られるように，デイヴィド1世が伯領を没収してここを王領とし，エルギン（Elgin）を王許都市にするとともにマリ湾の南岸に封土を創設してフランドル系のフレスキン（Freskin）を送りこみ，マルコム4世もエルギン近くのイニス（Innes）を同じくフランドル系のバラウォルド（Berowald the Fleming）に授封して「マリ問題」の解決に着手している。『ホリルード年代記』（1163）の「国王マルコムがマリの住民を移転させた」という記述は，マリにおけるこうした王権強化策の動きに言及したものであろう[26]。しかし，王権の拠点がマリ湾の海岸地帯にようやく築かれ始めたばかりであり，後述のように，「マリ問題」の解決にはさらに半世紀を要することになる。

b. ギャロウェイ

南西部のダンフリーズを流れるニス川から西の地域は，12世紀初頭から1234年までの間，「ギャロウェイ家」（de Galweia）の名で知られる家の支配下にあった。史料で確認できるこの家の最初の人物がファーガス（Fergus, d. 1161）である。彼の出自については，さまざまな説が提起されてき

たが，アーガイルのサマレッドと同様に，この地方のゲールとヴァイキングの混血つまり 'Gall-Gaedhill' と推測されている。その祖先などはまったく不明であるが，ファーガスの上昇を最初にもたらしたのはヘンリ１世(1100－1135)との結びつきであった。ファーガスのもつ兵士動員力や水軍を利用して，アイリッシュ海地域に対する支配の強化と北部国境地帯の安定化をはかろうとしたのであろう。ファーガスはヘンリ１世に取り立てられ，その庶子と結婚している。同時にファーガスは，娘（Affrica）がマン王（Olaf the Red）と結婚しているように，アーガイルやマン島を含めた西部島嶼地帯との結びつきを維持し続けている[27]。

ファーガスがスコットランドの残存史料に現れる最初は1136年頃にグラスゴウで発給された証書の中で，その証人欄に二男（Uhtred）とともに名前を連ねている[28]。ギャロウェイの重要性はスコットランド王権にとっても同じであり，また，デイヴィド１世は，即位直後からアンナンデイルやクライド川河口のレンフリュー(Renfrew)，カニンガムなどを忠臣に授封してギャロウェイ周辺の 'Norman Settlement' に着手していたから[29]，ヘンリ１世の没後に，ギャロウェイに対する統制を強めたのであろう。結局，ファーガスは，表３にあるように，1160年にマルコム４世の軍事遠征を受けて降伏し，ホリルード修道院に隠退を余儀なくされ，翌年死亡している[30]。

ファーガスの発給した証書が２通残存している。いずれも修道院に対する土地の寄進状であり，ラテン語で書かれているが，そのうちの１通（*c.* 1140×1160）では，みずからを「ギャロウェイの王」(rex Galwitensium) と称し，もう１通（*c.*1160）ではこの肩書を使わず単に「ファーガス」と称している[31]。おそらく，マルコム４世に降伏するまでは，「ギャロウェイの王」を名乗っていたのであろう。ファーガスの死後，「ギャロウェイ家」の一族がこの肩書を帯びることは２度となかったが，しかし，ギャロウェイがスコットランド王国に直ちに統合されたわけではなかった。ファーガスの２人の息子（Gilbert, Uhtred）がギャロウェイを分割相続したが，両者の間に激しい内紛が絶えず，ギャロウェイはウィリアム１世の軍事遠征を

少なくとも2回は受けている(表3)。しかし，ウートレッドの息子ローランド（Roland, d. 1200）が1176年頃にリチャード＝ドゥ＝モーヴィルの娘と結婚したことは，ギャロウェイの歴史に新たな局面を開くことになった。なぜなら，リチャードはウィリアム1世の最も信任厚い廷臣のひとりで，王国警護長官（Constable of Scotland）をつとめるとともにカンニンガムやローダデイル（Lauderdale）の領主であり，1196年にリチャードが没すると，これらの役職と所領がギャロウェイ家にもたらされることになったからである[32]。

モーヴィル家との姻戚関係はローランドをアングロ・ノルマン系貴族社会の中に組み入れ，スコットランド王権との関係をこれまでになく密接なものにした。これは，つぎのアラン（Alan of Galloway, d. 1234）についても同様で，ウィリアム1世の弟ハンティング伯デイヴィドの娘と結婚して王国最大の諸侯のひとりとなっている。また，この2人の時代にアングロ・ノルマン系の入植によってギャロウェイ自体の文化的変容が始まり，シェリフ管区の設定など王権の浸透が徐々に進んでいった(表2参照)。しかし，ローランドもアランも，ギャロウェイ家本来の支配地については，「王」を名乗ることこそなかったが，依然としてかなり自立した地位を保持し続けた。たとえば，王国の法に優先する「ギャロウェイの法」(Galwydia leges)の存続，アランが動員した150－200隻の船団と私兵の存在，マン島やアルスター東部とのつながりなどは，スコットランド王国の中にあって自立した「王国」の様相を示しているのである[33]。

c．アーガイル

西部のアーガイルについて，史料の上でその動向をわずかでも確認できるのは，12世紀前半の支配者サマレッド（Somerled）からである。彼の出自については，祖父（Gilla Adomnain）や父（Gilla Brigde）の名前と彼自身の名前（夏の戦士つまりヴァイキングの意味）から判断して，この地方や西部島嶼地帯に多く居住したゲールとノースの混血‘Gall-Gaedhill’と推定されている[34]。

アーガイルと西部島嶼地帯は，1098年のノルウェー王マグヌス（Magnus Barelegs）とスコットランド王エドガー（Edgar）との協定によって領土の分割がなされ，マン島を含む西部海岸沖のすべての島々はノルウェー王が領有し，本土のアーガイル，ロス，ケイスネス（Caithness）はスコットランド王が領有することとされていた[35]。同時代史料の中でサマレッドは，まず「アーガイルの王」（regulus Herergaide）として登場し[36]，1164年に戦死したときには「島嶼地帯とキンタイア（アーガイル）の王」（ri Innse Gall & Cindtire）と記されている[37]。つまり，ノルウェー領の島嶼地帯をも支配下におく「王」とみなされているのである。1156－1158年にサマレッドがマン王（Godfrey）との海戦に勝利してその島嶼王国の一部（スカイ，ルイスを除くヘブリディ諸島）を割譲されており，それ以後この肩書を帯びたと推定される[38]。

サマレッドの死後も「アーガイルと島嶼地帯の王」の肩書は，時には兄弟の間で「アーガイルの王」と「島嶼地帯の王」とに分割されることもあるが，その子孫に継承され，アーガイルと西部島嶼地帯は地理的のみならず政治的にも一体化していくことになる[39]。この結果，サマレッドとその子孫は，アーガイルについてはスコットランド王に，島嶼地帯についてはノルウェー王に，それぞれ服属することになる。しかし，後者については，上記マグヌスアがアイルランドで戦死して以後，1263年のホーコン4世（Haakon IV）の遠征まではこの地域に姿を現したノルウェー王はなく，その支配はきわめて名目的なものにすぎなかった[40]。

一方，スコットランド王権とアーガイルとの関係については，12世紀－13世紀初頭の3代の治世を通して国王の宮廷がこの地方を訪れたことも，シェリフ管区が設定されたこともないことは前節で見たとおりである。アーガイルに対する王権の動きを史料的に確認できるのは後述のようにアレグザンダー2世時代（1214－1249）になってからであり，12世紀については，きわめて断片的な次の2種類の史料しか残されていない。

その1つは，アーガイルとキンタイアに言及した国王証書6通（デイヴィド1世3，マルコム4世1，ウィリアム1世2）である。いずれも修道院

に対する特権状あるいはその確認状であるが，その中でアーガイルとキンタイアあるいは北部アーガイル（Argyll of Moray）から徴収される国王貢租と裁判収入の一部を当該修道院へ譲与する旨が明記されている[41]。ただし，このうちのダンファームリン修道院に対するデイヴィド1世とマルコム4世の証書には，「将来受け取ったら，その年に授与する」(eo scilicet anno quodo ego ipse inde recepero Can）との但し書きがあり，実際にはまだ徴収されていないことを示している。他の4通の証書には，このような表現はないが，その趣旨は同じと解釈される。つまり，これらの証書は，アーガイルやキンタイアを王国の一部と認識して国王の権利を主張したものであり，実際に国王収入の徴収がおこなわれていたことを示すものではない。

アーガイルに関するもう1つの史料は，1138年のスタンダードの戦いに関するリーヴォウ修道院長エイルレッド（Ailred of Rievaulx）の証言で，ギャロウェイとアーガイルおよび西部島嶼地帯の兵士も参戦してデイヴィド1世の軍を構成していたという内容である[42]。この証言が事実とすれば，これら兵士の参戦が何に基づくものか，すなわち王国住民の負う従軍義務(Scottish service, exercitus Scoticanus）によるものか，あるいは傭兵か。この問題についてR・オラムは前者に基づくとみなしてこれをデイヴィド1世の支配権の著しい拡大の証左とし[43]，R・A・マクドナルドはアーガイルや西部島嶼地帯が後にアイルランドへの傭兵（galloglass）の供給地であったことから類推してこれを傭兵とみなし，あくまでも西部の自立性を強調している[44]。しかし，支配権の拡大を示す史料は12世紀については他に存在せず，他方，傭兵に関する史料が残るのは13世紀半ばからであり，この問題自体に結論を出すのは困難である[45]。

アーガイルと王権との関係を考える上で重要なのは，この地方が地理的に岩山の続く〝ハイランド〟に位置していたという事実である。つまり，'inner zone' の東部から陸路を通って接近することは困難であり，船の用意が必要であった。一方，サマレッドがマン王と戦ったときに80隻の船を，1164年にレンフリューに侵入したときには160隻の船を率いたといわれ，

「アーガイルと島嶼地帯の王」は，かなりの規模の水軍を支配する「王」であった[46]。スコットランド王がこの地方に姿を現したと記録された最初はアレグザンダー2世で，1249年にアーガイルに軍事遠征している。『マン島年代記』によれば，この遠征のために「多数の船を集めた」というが，それでもケッラ島（Kerrera）で死亡している[47]。まだ「アーガイルと島嶼地帯の王」に対抗できる状況ではなかったことを示している。このような事実からも，スコットランド王権のアーガイルに対する支配は名目的たらざるをえず，この地方は西部島嶼地帯と一体となってかなりの自立性を保持していたといえる。

ii）スコットランド王権に対する反乱

a．反乱の首謀者

12世紀－13世紀初頭における‘outer zone’の第2の共通点は，これらの地域がスコットランド王権から自立していただけでなく，王権に対する反乱の温床になっていたことである。表3は，同時代史料の中から12世紀－13世紀初頭に発生した反乱についての記述をまとめたものである。これらの史料の大半は，『ホリルード年代記』や『メルローズ年代記』のように，スコットランド王権と密接な関係にある修道院で書かれたものである。したがって，反乱に関する記述は，いわば王権側の見方を表しているといえるが，その内容はきわめて簡単であり，反乱の目的などについては一切触れていない[48]。

表3で反乱の起きた時期を見れば，1181年のドナルド＝マクウィリアム（Donald MacWilliam）の反乱以外は1124年，1153年，1215年であり，いずれも王位継承のおこなわれた年かその翌年に反乱が始まっている。つまり，反乱の目的は王位継承権の要求にあり，この目的のために「マリの伯」または「マリの王」アンガスや「アーガイルの王」サマレッドと結び，あるいはロスなどの‘outer zone’を利用したと推測されるのである。

さらに，注目されるのは，1153年の『ホリルード年代記』の記述から，サマレッドの姉妹が「マルコム」と結婚していることである。サマレッド

自身やギャロウェイのファーガスがマン王家と姻戚関係を結んでいたことは既に述べたとおりである。これは，'inner zone' の有力者がスコットランド王家を中心に相互に姻戚関係で結ばれていたのとは対照的であり，'outer zone' では，スコットランド王家とは無関係にその有力者相互だけでなく，王位継承権を主張する反乱首謀者とも姻戚関係で結ばれていたことになる[49]。

次に，王位継承権を主張した首謀者が問題になるが，1181年からの反乱の首謀者であるドナルド＝マクウィリアムはダンカン2世（Duncan II, 1094）の孫であり，また，1215年にドナルドの息子ドナルド＝ベーン(Donald Bán)と行動をともにしたケネス＝マクエス(Kenneth MacHeth)は，マルコム＝マクエス（Malcolm Macheth）の子孫であることが判明している。マルコムは1157年に「国王と和解」し，その後ロス伯の肩書で国王令状を受け取り，また，この肩書でその死亡が『ホリルード年代記』に記されている。このように，12世紀末からの反乱の首謀者は特定されているのであるが，1121年－1156年の反乱の首謀者「マルコム」なる人物が誰かは，「スコットランド初期中世の歴史の中で解けない重要な謎のひとつ」とされ[50]，さまざまな説が出されてきた。

そうした説の中でもっとも有力とされてきたのは，1124年－1156年の「マルコム」と1157年に「国王と和解」したマルコム＝マクエスとを同一人物とみなす説である[51]。しかし，アレグザンダー1世の息子が，たとえ庶子であっても 'マクエス' つまり 'エダの息子' (mac Aed) とよばれるのは異例である。そこで，次に出されたのがマルコムをアレグザンダー1世の庶子としたのはオルデリック＝ヴィターリスの誤記であり，マルコムはアレグザンダー1世からデイヴィド1世の時代におそらくロス伯であった推定されるエダ(Aed)の息子で，ロス伯領を没収されたために反乱を起こしたとする説である[52]。ところが，ロス伯だけでは王位継承権を主張する根拠が乏しいために，最近ではエダはロス伯であるとともにマルコム3世の二男か庶子であろうという説まで現れている[53]。

しかし，1124年－1156年の「マルコム」と1157年のマルコム＝マクエ

スをまったく別の人物ととらえることもできる。その根拠の１つは，同時代人であるリーヴォウ修道院長エイルレッドが「マルコム」なる人物の反乱に言及しており，その中で，「マルコム」の父がデイヴィド（１世）と激しく対立して彼を憎みながら死んだこと，「マルコム」はその相続人であり，彼の反乱を鎮圧するためにデイヴィド１世がイングランドに援軍を求めたこと，その結果，大船団が組織されて「マルコム」の逮捕に貢献したことなどを記しているからである[54]。エイルレッドは「マルコム」の父の名前を明記していないが，証言の内容はオルデリック = ヴィターリスや年代記の記述と符合する。一方，1157 年のマルコム = マクエスは，先に紹介したように，アレグザンダー１世やデイヴィド１世の証書に登場する伯（comes Aed あるいは comes Heth）の相続人であろう[55]。父の死後，伯領の継承を認められなかったが，1157 年に「国王と和解」してそれが認められ，1168 年に死亡するまでロス伯の地位にあった。しかし，その後，ロス伯の肩書をもつ者は，1220 年代までは記録されていない。おそらくマルコム = マクエスの子孫にロス伯領は与えられず，王権の直轄下におかれていたのであろう。1215 年にケネス = マクエスがドナルド = マクウィリアムの反乱に加担したのは，ロス伯領の扱いに対する不満からであろう。このように，1124 年－1157 の史料に記されたマルコムを同一人物ではなく，２人のマルコムと解釈することができよう[56]。これも数多い仮説の１つにすぎないことはもちろんであるが，この問題に結論を出すには史料はあまりにも断片的すぎる。むしろ重要なのは「マルコム」やマクウィリアム家の反乱の背後にある問題，すなわち，王位継承方法をめぐる対立の問題である。

b. 反乱の背景

スコットランドにおける王位の継承は，９世紀中葉のケネス１世以後 11 世紀末のマルコム３世までは男系親族による傍系継承の慣行が維持されていた。これは，アイルランドに由来する継承慣行で，王位は王の息子に直接には継承されず，死亡した王のまず兄弟が順に継承し，その後，彼らの息子たちの間で，つまり従兄弟の間で順に継承されていた。この慣行は，

表3　スコットランド王権に対する反乱（12世紀—13世紀初頭）

年	史料	関連事項
1124	・アレグザンダー1世の死亡　弟ディヴィド1世の即位 ・「アレグザンダー1世の庶子Malcolmが王Davidに対して父の王国を要求して2回，反乱を起こし失敗」〔*OV*〕	1130×1153 Freskin へ Duffus (Moray) 授封〔*RRS*II no.116〕 1145×1153 Elgin (king's burgh)〔*CD* no.195〕
1130	「Moray伯AngusとMalcolmが5000人の兵とともにスコシアに侵入，Angusが殺害される」〔*OV*; *CM*; *CH*; *AU* (Angus ri Muirēb)〕	
1134	「Malcolmが捕らえられ，Roxburghに投獄」〔*CM*〕	
1153	・5月　デイヴィド1世の死亡　孫マルコム4世（12歳）の即位 ・「Somerledと，Malcolmの息子たちでSomerledの甥にあたる者らが国王マルコムに対して反乱，相当な混乱を引き起こした」〔*CH*〕	
1156	「Malcolmの息子DonaldがWhithorn (Galloway) で捕らえられ，父のいるRoxburghに投獄」〔*CM*, *CH*〕	
1157	「Malcolm　MachethがスコットランドとW和解」〔*CH*〕	
1160	・パースでストラサーン伯ら6人の伯が国王に反抗；国王がギャロウェイに3回遠征，彼らを降伏させる〔*CM*〕 ・国王がGallowayに3回軍事遠征して共謀者らを降伏させる；Fergus princeps Galwaieがエディンバラのホーリルード修道院に入る」〔*CH*〕 ・クリスマスの前に国王マルコムがSomerledと和解」〔*RRS* I no.175〕	1160 Berowald the Flemingへ Innes (Moray) 授封〔*RRS* I no.175〕 1160×1162 ロス伯 Malcolm Macheth 宛国王令状〔*RRS* I no.179〕
1161	「Fergus princeps Galwaieの死亡」〔*CH*〕	
1163	「国王マルコムがMorayの住民を移転させた」〔*CH*〕	
1164	Somerledがアーガイルや島嶼地帯そしてアイルランド出身の兵とともにRenfrewに侵入，戦死〔*CH*, *CM*, *AU*〕	
1165	12月　マルコム4世の死亡　弟ウィリアム1世の即位	
1175—77	Gallowayで内紛，GilbertがUhtredを殺害，国王ウィリアムのGalloway遠征〔*GHS*〕	1168 ロス伯Malcolm Machbeth死亡〔*CH*〕 c. 1178 David へ Garioch 授封〔*RRS* II no.205〕
1179	国王ウィリアムと王弟DavidがRossに軍事遠征，2つの城砦（Redcastle, Dunskeath）建造〔*CM*〕	
1181	Donald MacWilliamがスコットランド上陸，大勢を殺害〔*GHS*〕	
1185	国王ウィリアムのGalloway遠征，Roland of Galloway (son of Uhtred) と和平〔*GHS*〕	
1187	RossでDonald MacWilliamが蜂起，国王ウィリアムのMoray軍事遠征〔*CH*, *CM*〕，「Roland Of Galloway率いる3000人の若き兵士が国王の敵を打倒し，その首をウィリアム王に献上」〔*GHS*〕	1187×1189 Nairn (king's burgh)〔*RRS* II no.195〕

年	史料	関連事項
1196/ 1197−1202	国王ウィリアムの Harald Maddadsson (オークニ/ケイスネス伯) に対する軍事遠征〔*CM*〕	c. 1212 William Comyn-earl of Buchan 1212×1214 Hugh Freskin-lord of Sutherland〔*RRS* II no.520〕
1211− 1211.6	・Guthred MacWilliam (son of Donald) がアイルランドから北部に上陸，国王ウィリアム一諸侯と大軍をロスに派遣，翌年6月国王の息子アレグザンダーをロスに派遣，ファイフ伯 Malcolm を Moray の guardian に任命，Guthred が仲間の裏切りでバハン伯 William Comyn に引き渡される〔*Scotichronicon*, IV, 464-65〕 ・1211「スコットランド王が Guthred を追跡した後には，おびただしい数の死体が残された」〔*CM*〕 ・「イングランド王ジョンがスコットランド王にブラバンドの傭兵を援軍として送る」〔*Annales Sancti Edmundi* in *SAEC*〕	
1214	8月 「国王ウィリアムが Moray に行き，John, earl of Orkney & Caithness と和平」〔*Gesta Annalia*〕 12月 ウィリアム1世の死亡，アレグザンダー2世(16歳) の即位	
1215	「国王の敵 MacWilliam の息子 Donald Bán が Kenneth MacHeth およびアイルランドのある王の息子や大勢の悪党らとともに Moray に侵入。(Farquhar) MacTaggart が彼らを打倒，首をはねて新王へのあらたな贈り物として6月15日に献上した。このため，王は彼を新しく騎士に叙任した」〔*CM*〕	1220×1230 John Bisset-lord of the Aird and Redcastle Farquhar MacTaggart-earl of Ross Walter Comyn-lord of Badenoch & Lochaber
1221	アレグザンダー2世のインヴァネス遠征	
1223	Gillescop MacWilliam とその息子たちおよび Roderic がスコットランドの最北地に現れ，国王の手に引き渡された〔*Scotichronicon*, V, 117〕	
1228	Gillescop が Moray の木造の要塞を焼き討ち，Inverness の町を焼き払う……国王が駆けつけ，William Comyn (バハン伯) に多数の軍を与えて北部地域を任せる〔*Scotichronicon*, V, 143〕	
1229	Gillescop とその2人の息子たちが殺され首が国王に献呈された〔*Scotichronicon*, V, 145〕	
1230	「MacWilliam 家の生まれたばかりの娘が Forfar の町の広場で死刑を宣告，広場の十字架の柱に頭を打ち付けられて処刑」〔*Lanercost Chronicle* in *ESS*, II〕	

〔出典略記〕
〔*CD*〕 *The Charters of David I*; 〔*OV*〕 *Ecclesiastical History of Orderic Vitalis*; 〔*CM*〕 *The Chronicle of Melrose* in *ESS* II; 〔*CH*〕 *Chronicle of Holyrood*; 〔*AU*〕 *Annals of Ulster*; 〔*GHS*〕 *Gesta Henrici Secundi* in *SAEC*; 〔*SAEC*〕 *Scottish Annals from English Chroniclers*; 〔*ESS*〕 *Early Sources of Scottish History*; 〔*Scotichronicon*〕 *Scotichronicon by Walter Bower*; 〔*RRS*〕 *Regesta Regum Scottorum*

世代がすすむにつれて王を出した家が次々に分節化し，複雑な継承が繰り返されることになるが，未成年王の出現を防ぐという利点もあった[57]。こうしたゲールの古き慣行を直系継承に改めようとの動きはあったが，必ず傍系親族の反抗を招いてきた。先に紹介したマクベスによるダンカン1世の殺害はその例である。また，1093年にマルコム3世が死亡すると，マルコム3世の弟ドナルド＝ベーン(Donald＝Bán, 1093－1097)とマルコム3世の息子ダンカン2世との間で王位の争奪が繰り返され，1094年にダンカン2世が王位を取り戻したが，すぐにドナルドに殺害されている。1097年にダンカン2世の弟エドガーがドナルドを廃位して王位につき，この争いに決着がつけられた。これ以後，ドナルドの家は王位継承から完全に排除され，王位はエドガー（1097－1107）から弟のアレグザンダー1世に，その後は弟のデイヴィド1世に継承された。

ドナルド＝ベーンとダンカン2世の対立は，王位を傍系が継承するのか，直系が継承するのかという対立であったが，エドガー以後はゲールの伝統に基づいた傍系継承の慣行が続いた。つまり，マルコム3世の息子らは，叔父に対しては直系継承を要求したが，みずからは兄弟間で継承を繰り返したのである。王権に対する反乱の原因の1つは，ここにある。なぜなら，ダンカン2世には2番目の妻との間に男子ウィリアム(William fitz Duncan)がおり，直系継承であれば，ドナルドの廃位後はウィリアムが継承することになるからである。マクウィリアム家はこのウィリアムに始まる。ただし，ウィリアム自身は，後述のように王位継承を主張することはなかった。しかし，「マルコム」とその息子ドナルドは，アレグザンダー1世の庶子とはいえ，前王の直系として傍系のデイヴィド1世に対して王位継承権を主張したのであろう。

さらに，デイヴィド1世の王位を継承するのは，ゲールの継承慣行に従えば，やはりダンカン2世の息子ウィリアムである。なぜなら，デイヴィド1世はマルコム3世の末子であるから，次はマルコム3世の長子ダンカン2世の家に継承されることになるからである。しかし，デイヴィド1世は，自分の王位を生存している唯一の息子ヘンリが確実に継承するように

在位中に周到な準備をしている。たとえば，ヘンリが成年になった1136年頃からは，彼と連名で国王証書を発給して実質的に父と息子による共同統治の形式を取っている[58]。さらに，1144年（頃）の2通の勅許状にはヘンリが「国王継嗣」（rex designatus）と明記されており，彼を王位の継承者として広く認知させようとしている[59]。1152年6月にヘンリが父よりも先に死亡すると，デイヴィド1世はただちにヘンリの長子マルコムを王位継承者に指名し，ファイフ伯に命じてマルコムとともに「スコットランド各地を巡回させ，この少年が王国の相続人であることを布告させた」。これには大勢の軍隊が同行したという[60]。そして翌年5月にデイヴィド1世が死亡すると，12歳のマルコム（4世）が即位し，ここに祖父の願いどおり直系継承が実現されたのである。これは，スコットランドの歴史の中ではじめての未成年王の出現でもあった。

マルコム4世の即位は，古来の継承慣行から，たとえ未成年であっても直系が傍系に優先するという封建法の相続原理へと転換する決定的契機になり，これが先例となって1214年にアレグザンダー2世が16歳で，1249年にはアレグザンダー3世が8歳でそれぞれ即位する道を開いた。その意味で，これをM・リンチは「12世紀の転換点」とよび，C・W・S・バロウは「王位継承法における革命」と評している[61]。しかし，デイヴィド1世が孫のマルコムをみずからの相続人として認めさせるために大軍を同行させたという証言は，王国内にこの「革命」に対する抵抗や反発あるいはその危惧があったことを示唆している。事実，「マルコム」の息子らの反乱が続いている。一方，ダンカン2世の息子ウィリアムは，デイヴィド1世の即位前の1120年から1146年までたびたび国王証書の証人になっており[62]，これらの中にはヘンリを「国王継嗣」と明記した1144年の勅許状もあるから，ウィリアムは王位継承に関するデイヴィド1世の改革を承認していたと思われる。ウィリアム自身あるいは彼の一族が王位継承に関して異を唱えた形跡は，デイヴィド1世とマルコム4世の治世に関しては皆無である。

なぜ1153年や1165年ではなく，1181年になってウィリアムの息子ドナ

ルド＝マクウィリアムが蜂起したのか，その直接の理由は不明である。王権の浸透の希薄なインヴァネスから西の地域や北部のロスを反乱の場所に選んでいること，また年代記などに「上陸した」とか「アイルランドから」とあることなどから，周到な用意の上で機を狙っていたのであろう。しかし，ここは王権に放置された辺境であると同時に，アーガイルやギャロウェイと異なって，彼らを援護するような強力な在地勢力をも欠く地域であった。この点で注目されるのは1215年の反乱である。これもまた国王の即位直後に，しかも今回はマクウィリアム家とマクエス家とが結託して起こした反乱であるが，これを鎮圧したのは国王軍ではなく，ロス東部のゲール系領主ファーカー＝マクタガート（Farquhar MacTaggart）であった[63]。度重なる騒乱と破壊は反乱に終止符を打つことを望む人びとを生み出し，ほとんど無名に近いファーカーを彼ら住民のリーダにしたのである。

これによって12世紀以来，断続的に続いた王権に対する反乱はほぼ鎮圧され，王位継承に不満をもった家が1230年までに最終的に姿を消した。同時に，これらの反乱鎮圧の過程でマリとロス地方で本格的な'Norman Settlement'が進められ，これらの地方が最終的に王国へ統合されることになる。表1，表2の北部での動きと表3の情報とを照合すれば，反乱鎮圧と北部への王権の浸透が歩調をあわせて進んでいるのがあきらかになるであろう。さらに1220年から30年の間に，ハイランド中央部のバドノッホ（Badenoch）とロハーバ（Lochaber）がウォルタ＝コミン（Walter Comyn）に[64]，ロスの南のエアド地方（The Aird）がジョン＝ビセットに[65]，それぞれ与えられて諸侯領となり，'inner zone'からの入植が進んだ。しかし，重要なのは，ロスをこのような南からの新参者にまかせず，ファーカー＝マクタガートをロス伯にしてこの地方をゆだねている点である。これは，反乱鎮圧に対する褒賞であるとともに，騒乱の多かったこの地方を王国の政治的社会的枠組の中に組み入れるための政策でもあった。在地の信任厚い人物に伯領をゆだねることで，王権に対する信頼を高めようとしたのである。アングロ・ノルマンの新来者と在地のゲールの併用というスコットランドの「ノルマン・コンクェスト」の特徴は北部についてもいえ

るのである。（つづく）

註

1)「スコットランドの〝ノルマン・コンクェスト〟(1)—『国王文書集』の検討をとおして—」,『北海学園大学人文論集』, 第17号, 2000年11月, 1-39頁;「スコットランドの〝ノルマン・コンクェスト〟(2)—証人構成の検討をとおして—,『北海学園大学人文論集』, 第25号, 2003年10月, 1-40頁。

2) G. W. S. Barrow (ed.), *The Charters of David I: The Written Acts of David I King of Scots 1124-1153 and of his Son Henry Earl of Northumberland 1139-1152* 〔*CD*〕, Woodbridge, 1999; idem, *Regesta Regum Scottorum I: The Acts of Malcolm IV King of Scots 1153-1165* 〔*RRS*., I〕, Edinburgh, 1960; idem, *Regesta Regum Scottorum II : The Acts of William I King of Scots 1165-1214* 〔*RRS*., II〕, Edinburgh, 1971. 表1の対象としたのは, 証書そのものが残存している full text のみである。

3) 拙稿,「スコットランドの〝ノルマン・コンクェスト〟(1)」, 16-30頁。

4) ホリルード修道院(Holyrood Abbey)の権利を確認した証書(1165×1166)の中に, 公道上での窃盗事件あるいは流血事件を除く訴えに対して修道院長が裁判を行わない場合には, シェリフおよび司法長官(justiciar)が裁判を行うことと記されている ── 'abbas faciat plenum rectum callumpnianti de homine suo si abbas ei recto deficiat tunc uicemomes Justicia faciant ei rectum secundum quod calumpnians hominem abates iuste calumpniauerit.' ── *RRS*., II, no. 39.なお, 文中の「シェリフおよび司法長官が裁判をおこなう」という規定については, シェリフ裁判所に裁判不履行のあった場合に司法長官の裁判所に訴訟を移送するという意味か, あるいはシェリフが召集し司法長官が主宰する裁判所なのか, あきらかでない。また, ロバート＝ブルース2世（Robert Brus II lord of Annandale）の権利を確認した証書(1165×1172)の中に,「国王専管訴訟」(regalibus—発見物隠匿, 謀殺, 計画的襲撃, 婦女暴行, 放火, 略奪—）は, 国王が任命したブルースの代理人を通して'・・・Comitatus'内の国王裁判官の裁判所に移されるべきことと記されている ── 'Causa de inuentione thesauri. Causa de murda. Causa de assaltu prededitato. Causa de femina efforciata. Causa de arsione Causa de Rapina Concedo etiam ei ut hçç cause (sint) atacheate per unum hominem de feudo suo quem elegero. Tractate placitate per ante Justicias

meas infra Comitatum de (　　)' ── *RRS*., II, no. 80.これはシェリフ裁判所の存在を直接例証する史料ではないが，末尾の 'infra Comitatum de (　　)' を編者のG. W. S. Barrowのように「(ロクスバラの) シェリフ管区内」と解釈すれば，管内で開廷される国王裁判官の裁判にシェリフがかかわっていたと推測される。因みに，シェリフの司法的業務やシェリフ裁判所に関する法として，*Assize Regis Willelmi* の12条と19条がその残存する最初のものとされる。12条はウィリアム1世時代に作成され，そこには，「シェリフは領主の裁判所が開廷されるときには必ず出廷して裁判所が適切に開かれ，法と正義が正しく施行されているかを監督すべきこと」，「国王専管訴訟（謀殺，略奪，放火，婦女暴行）はシェリフが領主の裁判所から国王の裁判所に移すべきこと」と規定されている。一方，19条はウィリアム1世の治世後に作成されたものであるが，そこに「シェリフは40日ごとに自己の管区で裁判所を開廷すべきこと」と規定されている。したがって，上記2通の国王証書に記された規定は，*Assize* の法規定に沿った内容ということができる。*The Acts of the Parliaments of Scotland*, Vol. 1, Edinburgh, 1841, pp. 374-5, 377.12世紀－13世紀の国王裁判については，G. W. S. Barrow, *The Kingdom of the Scots*, Edinburgh, 2003 (2nd ed.), ch. 3 (pp. 76-81): H. L. MacQueen, *Common Law and Feudal Society in Medieval Scotland*, Edinburgh, 1993, pp. 42-50.

5) *RRS*., I, no. 304 (1153×1165)；拙稿，「スコットランドの〝ノルマン・コンクェスト〟(1)」，19頁。

6) ロージアンの 'Durandus' と Thor (Thorald) は同一人物と推定される。*RRS*., I, nos. 71, 86-87, 116, 151, 157, 216.

7) *RRS*., II, nos. 420 (1198×1202), 590 (1189×1195); G. W. S. Barrow, 'The Earls of Fife in the 12th Century', *Proceedings of the Society of Antiquaries of Scotland* 〔*PSAS*〕, Vol. 86 (1952-53), p. 61.

8) *RRS*., I, no. 252.

9) *Ibid*., no. 243 (1163×1164); *RRS*., II, nos. 148 (1171×1178), 149 (1173×1178), 206 (1178×1185). 'Malcolm mac Gillise' は宮内府のスタッフのひとりで，12世紀以前から存在する 'rannaire'(食料品配分係)などを担当していたと推定されている。*RRS*., II, p. 37.

10) A. Grant, 'Thanes and Thanages, from the Eleventh to the Fourteenth Centuries', in A. Grant & K. Stringer (eds), *Medieval Scotland: Crown, Lordship and Community, Essays presented to G. W. S. Barrow,* Edinbur-

gh, 1993, pp. 72-81.

11) Walter of Lindsay (d. 1222) は，William of Lindsay (lord of Crawford, justiciar of Lothian *c*. 1189-*c*. 1198) の弟。*RRS*., II, no. 257.

12) Roger de Mortemer は Fowlis Easter (Angus) を 1 騎士役で保有する領主。*Ibid*., no. 302 (1189×1194).

13) Humphrey of Berkeley (Humphrey son of Theobald) は，Conveth (Mearns) をウィリアム 1 世から 1/2 騎士役で授封，また，Walter of Berkeley（ウィリアム 1 世の Chamberlain, d. *c*. 1194）の女子相続人（Agatha）との結婚により，Inverkeilor (Angus) などの領主。*Ibid*., nos. 344-345 (1189×*c*. 1193).

14) William Comyn (d. 1233) は，Lenzie (Cumbria) をウィリアム 1 世から 1 騎士役で授封（*Ibid*., no. 257），1205 頃から justiciar of Scotia，1212 年頃にバハン伯。シェリフ就任の時期について，国王証書の文面から 1213 年以前であることは確かであるが，正確には不明。*Ibid*., no. 513.

15) David de la Hay は，父ウィリアム (d. *c*. 1201) の存命中に父の封土 Errol (Perthshire) を同じ条件（2 騎士役）で保有することを認められている。*Ibid*., no. 383 (*c*. 1195). また，彼の妻はストラサーン伯ギルバートの 3 女。註 18 参照。

16) William Freskin II は，祖父（Freskin）の代からマリの Duffus やロージアンの Uphall などを 2 騎士役で保有する領主。*Ibid*., no. 116 (1166×1171).

17) ウィリアムの父（Thor son of Swain, lord of Tranent）はデイヴィド 1 世時代にロージアンのシェリフ。また，クラックマナンのシェリフ，アレグザンダーはウィリアムの兄弟。表 2 参照。

18) 前者の代表例ストラサーン伯ギルバート，後者の代表例ウィリアム = コミンについて，拙稿，「スコットランドの〝ノルマン・コンクェスト〟(2)」，11-24 頁参照。

19) 'inner zone'，'outer zone' の語はG・W・S・バロウに始まる。G. W. S. Barrow, *Kingship and Unity: Scotland 1000～1306*, Edinburgh, 1989 (rep.), pp. 49-50.

20) 900 年にドナルド 2 世がマリのフォーレスで死亡し，その子マルコム 1 世 (944-954) がマリに遠征してこの地方の支配者と推測される人物 (Cellach) を殺害している。さらにマルコムの子ダブ (954-962) もマリのキンロス (Kinloss) で殺害されたという。M. O. Anderson, *Kings & Kingship in Early Scotland*, Edinburgh, 1973, pp. 252, 267.

21) W. F. Skene, *Celtic Scotland*, Vol. 3, Edinburgh, 1886, pp. 476-77; J. Bannerman, *Studies in the History of Dalriada*, Edinburgh, 1974, p. 132; B. Hudson, *Kings of Celtic Scotland*, Westport, 1994, pp. 127-48.

22) J. Bannerman, 'The Scottish Takeover of Pictland and the Relics of Columba', *Innes Review*, xlviii(1997), pp. 27-44; R. D. Oram, 'David Iand the Scottish Conquest and the Colonisation of Moray', *Northern Scotland*, 19 (1999), pp. 2-3; D. Broun, *The Irish Identity of the Kingdom of the Scots in the Twelfth and Thirteenth Centuries*, Woodbridge, 1999, pp. 147-48, n. 36; A. Woolfe, 'Moray Question' and the Kingship of Alba', *SHR*., 79(2000) p. 145-164; A. A. M. Duncan, *The Kingship of the Scots, 842-1292: Succession and Independence*, Edinburgh, 2002, pp. 32-49. 一方，G. W. S. Barrow は以前からマクベス一族をマリのモルマーととらえている。また，E. J. Cowan もマクベス論を著しているが，この問題には言及していない。G. W. S. Barrow, 'MacBeth and Other Mormaer of Moray', in *The Hub of the Highlands: The Book of Inverness and Districts*, Edinburgh, 1990 (reprint of 1975), p. 109; E. J. Cowan, 'The Historical MacBeth', in W. D. H. Sellar (ed.), *Moray: Province and People*, Edinburgh, 1993, pp. 117-41.

23) S. M. Airt & G. M. Niocail (eds), *Annals of Ulster to A. D. 1131*, Dublin, 1983, pp. 456; W. Stokes (ed.), 'Annals of Tigernach' s Continuation', in *Revue Celtique*, Vol. XVII, (1897), pp. 359, 369.

24) *Annals of Ulster*, pp. 518, 578.

25) M. Chibnall (ed.), *Ecclesiastical History of Orderic Vitalis*, Vol. 4. Oxford, 1983, BookVIII 22 (p. 276); M. O. Anderson (ed.), *Chronicle of Holyrood*, Edinburgh, 1938, p. 124; *The Chronicle of Melrose*, in A. O. Anderson (ed.), *Early Sources of Scottish History* 〔*ESS*〕, Vol. II, Stamford, 1990 (rev. ed.), p. 174.

26) 'rex Malcolmus Murevienses transtulit' —*Chronicle of Holyrood*, p. 142. フォーダンの年代記の巻末に収録されている *Gesta Annalia*（13世紀末の編纂）には，「マリの反逆的な人びとをマルコム王が軍事力で移転させた結果，その土地のもともとの住民は一人もいなくなり，代わってそこに国王は平和な人々を定住させた」と記されている。W. F. Skene (ed.), *Johannis de Fordun: Chronica Gentis Scotorum*, Vol. 1, Edinbrugh, 1871, pp. 256-57. この記述は，『ホリルード年代記』の上述の内容を補足説明するものと受け取られ，マルコム4世によって住民の入れ替えが行われたと解釈されてきた。

現在でも「民族浄化」(ethnic cleansing) の 12 世紀版とする研究者もいるほどである。B. Webster, *Medieval Scotland: The Making of Identity*, London, 1997, p. 39.

27) ファーガスについては，A. A. M. Duncan, *Scotland: The Making of the Kingdom*, Edinburgh, 1975, p. 163; R. D. Oram, 'Fergus, Galloway and the Scots', in R. D. Oram & .P. Stell (eds), *Galloway, Land and Lordship*, Edinburgh, 1991, pp. 117-130; idem, *The Lordship of Galloway*, Edinburgh, 2000, ch. 2 (pp. 51-86).

28) *CD*., no. 56. 一方，二男（Uhtred）は単独で 1159 年にロクスバラで発給された勅許状の証人になっている。*RRS*., I, no. 131.

29) アンナンデイルは Robert de Brus へ，レンフリューは Walter fitz Alan へ，カニンガムは Hugh de Morville へ，それぞれ授封された。*CD*., nos. 16, 274; *RRS*., I, no. 218.

30) ギャロウェイ軍事遠征の直接の原因については，『メルローズ年代記』がパースでの所謂「伯の反乱」に続いてこの軍事遠征を記述していることから，従来はこの反乱に対する制裁とみなし，年代記にある「彼ら」，「共謀者」をこれらの伯と解釈してきた。しかし，ファーガスがパースの反乱に加わったかどうかはあきらかでなく，また，『ホリルード年代記』は「伯の反乱」自体に言及していない（表 3）。したがって，「伯の反乱」とこの軍事遠征は別個の出来事とみなすのが妥当であろう。ギャロウェイ軍事遠征の後にサマレッドがマルコム 4 世と和解している事実から，最近ではマン島や西部島嶼地帯の動きにその原因を求める説が有力である。R. A. McDonald, *The Kingdom of the Isles: Scotland' Western Seaboard c. 1100-c. 1336*, Edinburgh, 1997, p. 52; R. D. Oram, *The Lordship of Galloway*, pp. 80-81.

31) W. Dugdale, *Monasticon Anglicanum*, VI, ed. by J. Caley et al, London, 1930, p. 838; K. J. Stringer, 'Acts of Lordship: the Records of the Lords of Galloway to 1234', in T. Brotherstone & D. Ditchburn (eds), *Freedom and Authority, Historical and Historiographical Essays presented to G. G. Simpson*, East Linton, 2000, p. 212.

32) R. D. Oram, *The Lordship of Galloway*, pp. 106-111; K. J. Stringer, *op. cit*., 205-6.

33) H. L. MacQueen, 'The Laws of Galloway: A Preliminary Survey', in R. D. Oram & .P. Stell (eds), *Galloway, Land and Lordship*, pp. 131-143; Hacon' s Saga, in *ESS*., II, p. 646; K. J. Stringer, 'Periphery and Core in

Thirteenth-Century Scotland: Alan son of Roland, Lord of Galloway and Constable of Scotland', in A. Grant & K. J. Stringer (eds), *Medieval Scotland*, pp. 82-84. ギャロウェイの文化的変容と統合の問題については，後述のアーガイルに関する同問題とともに稿を改めて検討する予定である。

34) W. D. H. Sellar, 'The Origins and Ancestry of Somerled', *SHR*., 45 (1966), p. 124. サマレッドについては，拙稿，「Lord of the Isles の起源を探る—始祖サマレッドを中心に—」，『エール』，16号 (1996)，参照。その後の研究については，R. A. McDonald, *The Kingdom of the Isles*; idem, 'Rebels without a Cause?: The Relations of Fergus of Galloway and Somerled of Argyll with the Scottish Kings, 1153-1164', in E. J. Cowan & R. A. McDonald (eds), *Alba: Celtic Scotland in the Medieval Era*, East Linton, 2000, pp. 166-186; W. D. H. Sellar, 'Hebridean Sea Kings: The Successors of Somerled, 1164-1316', in *ibid*., pp. 187-218.

35) A. A. M. Duncan & A. L. Brown, 'Argyll and the Isles in the Earlier Middle Ages', in *PSAS*., XC (1959), pp. 193-4.; R. Power, 'Magnus Barelegs' Expeditions to the West', *SHR*., 65(1986), p. 121.

36) マン王 (Olaf the Red) の娘と結婚したときの肩書であるが，結婚の年は明記されていない。G. Rroderick (ed.), *Chronicle of the Kings of Man & the Isles*, Belfast, 1979, f. 35v.

37) W. Stokes (ed.), 'Annals of Tigernach', p. 195. キンタイアはアーガイルの南西部の地名であるが，この場合はアーガイル地方全体をさす。

38) G. Rroderick (ed.), *op. cit*, f. 36-37v.

39) 'ri Airir Goidel' 'ri Innce Gall' のタイトルは最終的にラテン語の 'dominus Insularum' に取って代わられた。このラテン語タイトルを最初に使用したのは John MacDonald of Islay で，彼はエドワード3世に宛てた1336年9月21日付けの書簡の中でみずからを 'dominus Insularum' と名乗り，これ以降1493年までマクドナル家の当主が4代にわたって 'dominus Insularum' を自称した。J. & R. W. Munro (eds), *Acts of the Lords of the Isles 1336-1493*, Scottish History Society, Edinburgh, 1986, no. 3 (pp. 3-4).

40) 同時代のイングランドの年代記によれば，マン王はマン島と31の島をノルウェー王から保有しているが，その義務は新しい王が即位した時に金10マルクを贈ることだけであるという。Robert de Torigni, *Chronica*, in A. O. Anderson (ed.), *Scottish Annals from English Chroniclers* 〔*SAEC*〕, Stamfod, 1991 (rep.), p. 245.

41) *CD*., no. 147 (1141×1147)—Holyrood Abbey, 'de medietatem mee decime de meo cano. & de meis placitis & lucris de Kentyr & de Errogeil' ; *CD*., no. 172 (*c*. 1150),—Dunfermline Abbey, 'Et concedo ei dem ecclesie dimidiam partem decimi mei de Ergaithel et de Kentir, eo scilicet anno quodo ego ipse inde recepero Can' ;*CD*., no. 185 (1152×1153)—Urquhart Priory, 'Et decimam cani de Ergaithel de Muref et placitorum et tocius lucri eiusdem Ergaithel'; *RRS*., I, no. 118 (1154×1159)—Dunfermline Abbey, 'Et concedo eidem ecclesie dimidiam partem decimi mei de Ergaithel et de Kentir, eo scilicet anno quodo ego ipse inde recepero Can' ; *RRS*., II, no. 30 (*c*. 1165)—Dunfermline Abbey; *RRS*., II, no. 39 (1165 or 1166)—Holyrood Abbey.

42) Ailred of Rievaulx, *Relatio de Standardo*, in *SAEC*., pp. 199-200.なお，この戦いにサマレッドおよび上述のギャロウェイのファーガス自身が係わっていたことを示す史料はないが，1139 年の協定でイングランドへ差し出すことになった 5 人の人質の中に 'Earl Fergus の息子' が含まれている。Richard of Hexham, *De Gestis Regis Stephani*, in *ibid*., p. 214.

43) R. D. Oram は，1991 年の論文の中で，1138 年のギャロウェイの兵士を傭兵とみなしていたが，近著においてこの説を撤回し，アーガイル・西部島嶼地帯の兵士を含めてスコットランド王権への服従義務からの参戦としている。R. D. Oram, 'Fergus, Galloway and the Scots', pp. 123-24; idem, *The Lordship of Galloway*, Edinburgh, 2000, pp. 71, 84.

44) R. A. McDonald, 'Rebels without a Cause?' p. 177.

45) 'galloglass' の語そのものの史料初出は 1290 年であるが，1259 年にサマレッドの子孫のひとり（Alan MacRuairi）が 160 人の '若い戦士'（oglaoch）とともにコナハトの領主と行動をともにしていることが記録されており，この戦士は 'galloglass' と推定される。さらに，1247 年には 'アーガイルの王 Mac Somurli' が O' Donnel を支援して Maurice fitz Gerald と戦っている例がある。このアーガイルの王(ri Airir Gaidil)はサマレッドの孫の Duncan で，彼もアイルランドのゲール系領主に雇われた 'galloglass' の長と推定され，傭兵の供給は既に確立していたとみなされるが，12 世紀については不明である。A. M. Freeman (ed.), *Annals of Connacht (A. D. 1224-1544)*, Dublin, 1998 (rep.), pp. 90, 184; J. Lydon, 'The Scottish Soldier in Medieval Ireland: The Bruce Invasion and the Galloglass', in G. G. Simpson (ed.), *The Scottish Soldier Abroad: 1247-1967*, Edinburgh, 1992, pp. 1-15.

46) G. Rroderick (ed.), *Chronicle of the Kings of Man*, f. 37r, f38v.

47) *Ibid*., f. 46v.これより先の1240年にアレグザンダー2世がアーガイル中部の土地を在地の有力者(Gillascop MacGilchrist)に1/2騎士役奉仕を条件に与えている。これが残存史料に記されたアーガイルにおける授封の最初の例であるが，軍事遠征に先立ってこの地方の有力者に対して取られた懐柔策の1つと考えられる。J. R. N. Macphail (ed.), *Highland Papers*, Vol. II, Scottish History Society, Edinburgh, 1916, pp. 121-24.

48) R. A. McDonaldは，これらの年代記の簡単な記述は，王権に対する反乱を無視しようとする意図のあらわれであり，それ自体が反乱のもたらした衝撃の大きさの証明であることを強調している。R. A. McDonald, *Outlaws of Medieval Scotland: Challenges to the Canmore Kings, 1058-1266*, East Linton, 2003, pp. 178-79. 12世紀－13世紀の反乱を本格的に取り上げたのはマクドナルドが最初であり，多数の論文も発表されているが，史料解釈などに変化が見られるため，本稿では上記の最新の著書と論文，'Old and New in the Far North: Ferchar Maccintsacairt and Early Earls of Ross, *c*. 1200-1274', in S. Boardman & A. Ross (eds), *The Exercise of Power in Medieval Scotland, c. 1200-1500*, Dublin, 2003, pp. 23-45による。これ以外には，"Treachery in the Remotest Territories of Scotland": Northern Resistance to the Canmore Dynasty, 1130-1230', *Canadian Journal of History*, 33 (1999), pp. 161-92; 'Rebels without a Cause?', in E. J. Cowan & R. A. McDonald (eds), *Alba*: *Celtic Scotland*, East Linton, 2000, pp. 166-186，などがある。

49) R. A. McDonald, 'Matrimonial Politics and Core-Periphery Interactions in Twelfth- and Early Thirteenth-Century Scotland', *Journal of Medieval History*, 21(1995), pp. 240-42.

50) A. A. M. Duncan, *Scotland: The Making of the Kingdom*, p. 166.

51) ヴィターリスの『教会史』のラテン語原文には，「アレグサンダー1世の庶子」(Melcofus autem nothus Alexandri filius) とあるだけであるが，A. O. Andersonが*SAEC*の初版(1908)の中でこの部分の英語訳に'MacHeth'の名前を挿入した。これがこの説の始まりであり，Chibnall編の『教会史』(1983)の英語訳にもこの名前が挿入されている。つまりアレグサンダー1世の庶子と，エダの息子という2人分の形容詞がマルコムひとりに与えられたのである。A. O. Anderson, *SAEC*., p. 158; M. Chibnall (ed.), *Ecclesiastical History of Orderic Vitalis*, Vol. 4, BookVIII 22 (p. 276).

52) G. W. S. Barrow は，アレグザンダー 1 世の庶子説を採っていたが（*RRS*., I, pp. 3, 7-8），その後，修正してロス伯の息子としている。*RRS*., II, p. 13; *Kingship and Unity*, p. 51.

53) A. Grant, 'Province of Ross and the Kingdom of Alba', in in E. J. Cowan & R. A. McDonald (eds), *Alba*, p. 111.

54) Ailred of Rievaulx, *Relatio de Standardo*, in *SAEC*., pp. 193-94.

55) A. C. Lawrie (ed.), *Early Scottish Charters: Prior to A. D. 1153*, Glasgow, 1905, nos. 36 (*c*. 1120), 49 (*c*. 1124); *CD*., nos. 33 (1127×1131), 44 (1128×1136).

56) R. D. Oram, *The Lordship of Galloway*, pp. 70-71; A. A. M. Duncan, *The Kingship of the Scots, 842-1292*, pp. 71-72.

57) 詳しくは拙稿，「王位の継承慣行をめぐって：9－11 世紀のスコットランド」，『エール』，13 号（1993），18-31 頁参照。

58) デイヴィド 1 世の国王証書 200 通のうち，デイヴィド 1 世の名前で出されたものは 146 で，デイヴィド 1 世とヘンリとの連名が 3，ヘンリの名前で出されたものが 51 である。2 人の連名によるもの自体はわずかであるが，デイヴィド 1 世の 146 通を仔細に検討すれば，そのうちの 11 通には「わが息子ヘンリの承認によって」などの文言が付記されている。さらにデイヴィド 1 世の名前で出された 15 通の勅許状とほぼ同じ内容の勅許状がヘンリの名前で別個に発給されている。これらを合計すれば，実質的に 5 分の 1 の国王証書にヘンリが関与していたことになる。拙稿，「スコットランドの〝ノルマン・コンクェスト〟(1)」，6 頁参照。

59) *CD*., nos. 126, 129.

60) *John of Hexham*, in *SAEC*., pp. 227-28.

61) M. Lynch, *Scotland: A New Hisotry*, London, 1994 (rep.), p. 80.; G. W. S. Barrow, *Scotland and Its Neighbours in Middle Ages*, London, 1992, pp. pp. 40-41,

62) *Ibid*., nos. 14, 23, 52-4, 56, 6-70, 83, 120-21, 126, 130, 139, 147.

63) ファーカーについては，A. Grant, 'Province of Ross and the Kingdom of Alba', pp. 117-123; R. A. McDonald, 'Old and New in the Far North', pp. 28-31.

64) G. W. S. Barrow, 'Badenoch and Strathpey, 1130-1312', *Northern Scotland*, 8 (1988), pp. 4-7.

65) A. A. M. Duncan, *Scotland: The Making of the Kingdom*, p. 198.